

いつの間にか、という言葉がぴったりだった。抜き身のレイピアを水平に構えて、音もなくガルアーダに近づく影があった。

誰も彼女に気づかなかった。ガルアーダに相対していた君ですら、まるでガルアーダの影から飛び出してきたように見えた。レディ・マチルダの正確無比なる剣は、真っ直ぐにガルアーダの急所を正確に刺し貫いた。

奇妙な声をあげてガルアーダが飛び上がる。異様に満ちた猛獣の声ではない。足を滑らせて地面に落ちたネコのように、情けない声を漏らしたのだ。

「内臓まで届かなかったわ」

マチルダは溜めていた息を吐き出しながら、残念そうに告げた。

「あと数センチで、街を守れたのに」

大好きなマチルダ先生の横顔を見ながら、徹底した冷静さに君は舌を巻く。確かにそのとおりだ。肛門を刺したなら、内臓に達する傷を負わせたいものだ。

ガルアーダの背中が盛り上がり、どす黒い異様なオーラが漏れ出す。全身の毛を総毛立たせたまま、ガルアーダが吠える。恐怖に打ち負ける君たちではなかったが、身のすくむ思いのする声だ。

後脚の筋肉が膨張し、ガルアーダは猛獣が獲物に襲いかかるときの前動作をする。一瞬身体を左右に揺すって、タイミングをはかる動作。

「気をつ——」

ヘイルが言い終わらないうちに、ガルアーダが消えた。攻撃に備えて構えていた全員の視界から、消えたのだ。

一陣の風が吹き抜けた。

白い破片が飛んでくる。カツンと音を立てて、愛しい人の歯が君に当たる。先生の、歯だ。

ほんのわずかな時間のうちに、マチルダ先生の身体は吹き飛ばされていた。悪い夢のようにゆっくりと、先生の血が君の装備に飛び散る。塔の外に飛び出すマチルダ先生の姿を、首をよじって追いかける。

死

何も分からないまま、君は塔の外へと飛び出す。この距離から落ちては、死んでしまう。君の頭にあったのは、それだけだった。マチルダ先生を守ること。それだけだった。先生を突き飛ばしたガルアーダの横を走り抜け、雲の浮かぶ塔の外へと飛び出した。

空中で、マチルダ先生の右手を掴む。地面に落ちるまで、あと数秒。マチルダ先生の頭を引き寄せ、抱きしめるように両腕で守る。先生を抱えて落ちる、永遠にも等しい数秒。その時間すべてのなかで、君は幸せを感じていた。それが最期の数秒であることも、小さなことのように思えた。

激しい衝撃とともに、君の記憶は途絶えた。

一六階のバルコニーで、君は目を覚ました。

マチルダ先生を見る。先生の胸が呼吸に合わせて動いている。生きている……よかった……先生……。それから君は、自分自身を振り返る。信じられない。生きている。それどころか、ほとんど怪我もしていない。

一階まで落ちていたら、間違いなく完璧に死んでいた。だが、そうでなかったにしても、四階分の高さを落ち、石づくりのバルコニーに叩きつけられたのだ。君の身体が頑丈だったから生き延びた？

違う。二〇階と一六階の間で、君は誰かに助けられたのだ。塔から飛び出した君とマチルダ先生の勢いは激しすぎた。一六階のバルコニーどころか、間違いなく一階まで直接落ちる落下軌道を描いていた。それを、一八階のあたりで誰かが変えてくれたのだ。

背負い袋を確かめる。外側に、そいつの投げてくれたかぎ爪付きロープが引っかかっている。一瞬だけ姿が見えた。仮面舞踏会みたいなマスクをつけて、黒と赤のマントをひるがえしていた……あいつ、どこかで見たようなやつだった。

君は「あいつ」に心当たりがあった。記憶の中にあるあいつは、あんなに派手な服装はしていなかった。怪盗なんてあだ名がついていたけど、タキシードにマントなんて格好じゃなかった。でも、きっとあいつは仲間の一人だ。ガリィ・ザ・ダーク。お前に助けられたのか。

誰が残してくれたのだろう、二〇階からロープがぶら下がっている。マチルダ先生を背負い、君はそのロープを登る。一度落ちたせい、恐怖はなかった。

二〇階にたどり着くと、そこにヘイルの姿はなかった。エクソニユールの遺体もない。ガルアーダの姿もない。助けてくれた男もいない。

冒険記録紙から、不潔な仲間を除くすべての仲間の名前を消すこと（騎乗生物は仲間ではないので消さない）。

二〇階で何が起こったのか。ヘイルはどこに行ったのか。壁を登っていたあいつは、今どこか。アヴィオンはベルナデッタに追いついたろうか。ガルアーダは、どこだ。

何も分からないまま、今は休むしかない。マチルダ先生が目を覚ますまでの短い間、君はごろりと横になる。何が起ころうと、やることは一つだ。上の階を目指すこと。オレニアックス剣術学校の仲間たちは、全員上を目指している。登り続ければ、自然に会うことになるだろう。

冒険記録紙にレディ・マチルダを仲間として記入すること。